

# 日本語の中の仏教

## 有頂天（うちょうてん）

得意の絶頂にあって夢中になっている心理状態を「有頂天」という。人によって喜びのてっぺんには、いろいろ格差があるけれども、それぞれが、これ以上ない、という幸福感に浸っているありさまを、「有頂天になっている」というのである。

これには仏教の宇宙観がもとになっている。

仏教では、天上界を欲界、色界、無色界の三段階に大きく分けて考える。欲界はまだ欲望をたきれない人間も含めて六天、色界は清浄で欲は離れているが、まだ物質にとらわれることのある世界で十七天、その上に無色界の四天を数え、都合三界二十七天に分けられる。このうち、色界の最高を色究竟天といい、ここを有（う、物質）の頂にある天、すなわち「有頂天」とする。

しかし、無色界のように、有を超越した精神のみの世界とちがいで、色界に属する以上は未解脱の境涯であるから、修行を怠ったりすると、たちまち転落してしまうこともある、という。

## あなたに贈るラジオ放送番組

### 浄土宗の時間

九州毎日放送	日曜日	午前六時三十分より
文化放送	日曜日	午前五時三十五分より
中部日本放送	日曜日	午前六時五分より
毎日放送	日曜日	午前五時三十五分より
東北放送	土曜日	午前五時三十分より

### 平成七年度法事年回表

一周忌	平成六年に亡くなられた方
三回忌	平成五年に亡くなられた方
七回忌	平成元年、昭和六十四年
十三回忌	昭和五十八年
十七回忌	昭和五十四年
二十五回忌	昭和四十六年
三十三回忌	昭和三十八年
五十回忌	昭和二十一年

念仏講

法然上人の御命日に寺の本堂にてお経をあげ念仏を唱えて上人を忍ぶとともに、お念仏に精進させていただく講中で、浄土宗の寺院では古くから行われています。毎月二十五日午前十一時より  
(変更の場合あり)

### 十四日会

毎月十四日（八月はお休み）午後七時より  
本堂にてお経の練習とお念仏の会です。  
十四日会は浄土宗開宗の日（三月十四日）と善導大師の御命日（三月十四日）にちなんで行っております。

# 香林

香林山 無量寺  
 機関紙 第5号  
 発行者 堤 俊海  
 香林編集委員会  
 久留米市本町 8-4  
 TEL0942-32-3010  
 FAX0942-32-2701



## 法然上人のおことば

（一紙小消息）

末代の衆生を、往生極楽の機にあてて見るに行すくなしとも、疑うべからず。一念十念に足りぬべし。罪人なりとも、疑うべからず。罪根深きをもきらわじとのたまえり。時くだれりとも、疑うべからず。法滅以後の衆生、なお、もて往生すべし。況や近來をや、わが身わろしとも疑うべからず。自身は煩惱具足せる凡夫也とのたまえり。

十方に浄土おおけれど、西方を願うは、十悪五逆の衆生の生まれ故なり。諸佛のなかに弥陀に帰したてまつるは三念五念に至るまで、自ら来迎し給う故なり。諸行の中に念仏を用いるは、かの仏の本願なる故なり。

いま弥陀の本願に乗じて、往生しなんに願として成ぜずと言う事あるべからず。本願に乗ずることは信心の深きによるべし。うけがたき人身をうけて、遭いがたき仏の本願において、おこしがたき道心をおこして離れがたき輪廻の里をはなれて、生まれがたき浄土に往生せんこと悦びのなかの悦びなり。

罪は十悪五逆の者も、生まると信じて、少罪をも犯さじと思つべし。罪人なお生まる、況や善人をや。行は一念十念なお、むなしからずと信じて、無間に修すべし。一念なお生まる、況や多念をや。阿弥陀佛は不取正覚のことは成就して、現に彼の国にましますば、定めて命終の時は来迎し給はん。

釈尊は善哉、我が教えに随いて、生死を離ると知見し給い、六方の諸佛は悦ばしき哉、我が證誠を信じて、不退の浄土に生まると悦び給うらんと、天に仰ぎ、地に臥して悦ぶべし、このたび弥陀の本願にあつ事を、行住坐臥にも報ずべしかの仏の恩徳を。頼みて頼むべきは、乃至十念の詞、信じても猶信すべきは、必得往生の文也。

仏壇のまつり方 その二

「お仏壇はどこへ置くのが一番よいでしょうか？」という質問をよくされます。まず、方角の問題ですが、お仏壇は阿弥陀さまのお館であり、西方極楽を表したものですから「東向き」がもっとも納得できる方向といえます。しかし、家の都合で東向きに安置できない場合は、どちらでもよいのです。「ご本尊のある方向が西方極楽と考えて礼拝して下さい。」

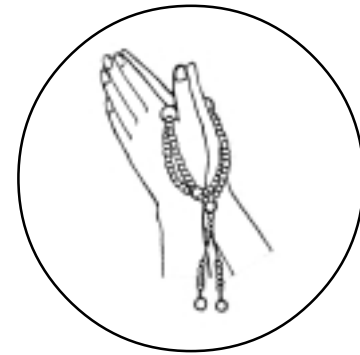
「お仏壇は、二階に置いてはいけない」という言い伝えがあります。が、現代の住宅事情からしてもむりなことでしょう。これは「なるべく生活に密着した所へ安置する」と考えていただければよいことです。

さらに、「お仏壇の上に汚い物を置いてはならない」ともいわれませんが、これもお仏壇を尊ぶ心の現れです。得てして、お仏壇の上が、押入れになったり、階段になったりということがありますが、できるかぎり避けたいものです。どうしても避けられない場合、昔からお仏壇の上の天井に「雲」あるいは「天」という文字を書いた紙を張ってお仏壇が家の一番高いところにあることを表したりしたものです。

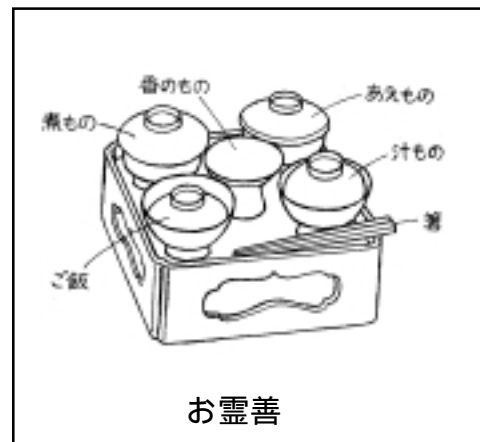
吉兆種々いわれるお仏壇の安置場所ですが、お仏壇の安置場所が「我が家の聖域」であるとお考えいただくことが基本といえます。また、不幸の時に白布をかぶせるのは、神道のしきたり、神棚にはかぶせるようですが、仏壇にはその必要はありません。

お参り作法

毎朝、洗面を済ませたら、お仏壇に、お灯明とお線香をあげましょう。「ご飯を炊いた時は、まず「お仏飯」をお供えしましょう。「お初」をお供えすることが原則です。「お仏飯」と一緒にお初のお茶、お水をお供えします。一日に一度は新しいものと取り替えましょう。お花は毎日取り替えなくてもよいでしょう、古くならないうちに新しいものと取り替えて下さい。」



日課念珠と堅実心合掌



お霊善

お供え物は大切な命日だけでもよろしいでしょう。家族でおやつを頂くのであれば「まず仏さまへ」の心掛けを大切に、また頂戴物があつたときも「まず仏さまへお供えする」ことが大切です。仏前へのお給仕が済みましたら、居住まいを正して座り、呼吸を整え、気持ち静かに落ち着かせお参りをいたします。まず、必ずお数珠をもちましょう。浄土宗では二連になった日課数珠が一般的です。ふだんは左手首に掛け、合掌の時は両親指に掛けます。次にお香ですが、これは大切な仏様へのお供え物です。なるべく香りのよいものを選びましょう。また、常に香炉をきれいにしておくことが大切です。仏様へのお参りの時は、必ず合掌を致します。合掌の形は、両手のひらの指と指とを、隙間ないように合わせ(堅実心合掌)、胸の前、やや斜めの位置とします。この姿で、お経やお念仏をお唱えします。よく、「私がお経が読めません」と嘆かれる方がありますが、浄土宗のお経はすべてお念仏のすすめ、「南無阿弥陀仏と申しなさい」ということが書かれているのです。お念仏だけお唱えするだけでもよろしいのです。

智慧はわが耕す鋤

法句経より

仏陀はマガダ国のエカサ ラという村にとどまっていた。その村はある婆羅門の所領で、ちょうど種蒔きの季節であり、かれも種蒔きにいとがしかつた。

ある朝のこと、仏陀が托鉢のために、かの婆羅門の家の前に立つた。ちょうどその時、彼は村人に食べ物を分配していたが、仏陀の托鉢のすがたを見ると、つかつかと歩み寄って言った。

「沙門よ、わたしは田を耕し、種を蒔いて、食を得ている。あなたも、みずから耕し、種をまいて、食を得てはごうか。」

すると、仏陀は、さらりと答えて言った。「婆羅門よ、わたしも、耕し、種を蒔いて、食を得ている。」

それを聞いて、婆羅門は、我が耳をうたがうような顔をして、じつと仏陀のおもてを見つめていたが、やがて、問うて言った。

「だが、わたしどもは、誰もまだ、あなたが田を耕したり、種を蒔いたりする姿を見た者はいない。いったい、あなたの鋤はどこにあるのですか、あなたの牛はどこにいるのですか。あなたは何の種を蒔くのですか。」

そのときの、仏陀が、その婆羅門に答えたことばを、経典はつぎのような韻文をもって記しとどめている。

「信はわが時く種子である。智慧はわが耕す鋤である。身口意の悪業を制するは、わが田における除草である。精進はわが引く牛にして、行いて帰ることなく、おこないて悲しむことなく、われを安らげき心にはこぶ。」

大地を耕して、荒れ地をひらき、美田となして、ゆたかな収穫をあげるのが農業のいとなみである。仏教は人間の荒れ地をひらき、つるわしい人格を開発して、ゆたかな人間のいとなみを得んとする道である。

お念仏と私

高浪孝子

歳月の流れの早さに驚くこの頃です。念仏講にお誘ひ頂き、御縁を結びまして二十有余年経ちました。御住職様はじめ、先輩皆様のお導きをいただき、お陰様で数々の勉強をさせて頂きましたことを、心から感謝申し上げます。殊に、先年御他界遊ばされました大和尚さまの御風格には深く心ひかれ、私が念仏に精進させて頂いた基に成ったやうに思います。

お寺の奥様が「お講に入られたら若くなられますよ」と申されましたが、お言葉通りほんとうに元気に過ごさせて頂いています。本山の御法主様のお話しに「念仏は如来様の御本願のお名号だから念仏を唱える者には光明が射して救われる」と聞き及びました。私共にはいろいろ思い煩う事なく、現在いまこの時を大切に心の中に如来様を宿らせて頂き、真心こめて念仏を唱え続けたいと思ひます。

時には、念仏を申しながら心乱れ雑念の湧くことがあります。法然上人様は凡夫の性をそのまま肯定されて、汚れた心そのままひたすら称名念仏すれば、必ず往生出来ると申しておられます。私事で恐れ入りますが、主人が生前「我を張らず平たくなれ。」と申していた言葉と思ひ合わせ、素直な気持ちでこの後も日々の生活を反省し己を見つめて精一杯念仏を申しつづけたいと存じます。今後とも、ご住職様はじめ皆様方のお導きを心からお願ひ申し上げます。

末になりましたが、先代の大和尚様の御冥福を心からお祈り申し上げます。 合掌